

こんばんは池田滋・智恵です。

早いもので1ヶ月が過ぎました。懐かしい思いと共に、キナバル登山証明書とポストカードが部屋に飾られています。思えば6月末、山溪を見ていた主人が突然「7月13日発の予約がとれたらキナバルへ行こう！」と言い出したのが始まりでした。出発1ヶ月を切っていたので無理だと思いつつ電話をしたところ、現地に問い合わせただき日程を組んでくれた石田さん、急なお願いを聞いて頂き本当に感謝しています。石田さんのおかげで一生忘れられないボルネオの自然を感じる事が出来ました。



この楽しかった7日間を日記にしましたので暇な時に読んで下さい。

7月13日

成田からKKへの直行便機中、これから始まる東南アジア最高峰のキナバル登山とジャングル体験に、胸ワクワクさせながら主人とワインで乾杯して爆睡。目が覚めると夕闇迫るKKに着いていた。空港には日本語が上手なファビアンが待っていて一安心。

本日の宿であるキナバル公園ヒルロッジまでの道のりは、ものすごいスピードで走る長距離バスにあおられながらも、何処か日本の田舎を走っているような安心感があり、あっという間のドライブであった。



ロッジには温水シャワーもあり、予想以上に綺麗で涼しく安眠できた。

7月14日

5時すぎ、隣の外人の声で目が覚めてしまい少し寝不足。窓から外を見ると、昨夜は真っ暗で分からなかったが、目の前にド？んと切り立った山頂が見えるではないか。す、すご？い！！パンフそっくり、実物だ？！思わず写真を撮りまくってしまった。寝不足は吹っ飛び、天気も良く、気分はサイコー！朝食まで時間があるので良く整備された遊歩道を散



歩すると、珍しい樹木や花に南国を感じた。レストランの朝食は、これから登山という事を忘れてしまうほどゆっくりとしたリゾート気分を味わえたが、大きいマグカップに山盛りコーヒーにはびっくりした。ここは、前夜一泊ではもったいない場所である。ちなみに日本では、私と主人の登山は前夜発なら駐車場脇にテントを張り、朝食はテントを片付けながらサンドイッチかおにぎりをかぶりついているというものだ。



8時15分、ロッジ前にファビアンと噂の黒いゴム靴（＝アディダスキャンポン）を履いたガイド、ジャリーンが迎えに来てくれた。車で10分の登山ゲートに移動し、8時50分出発。ガイドブック通り最初は短い下り、そしてカールソン滝、その後しばらくすると急登が続くが良く整備されているのと、ジャリーンの歩くペースが適切で、歩幅が小さく無駄が無いので苦にならない。苦になるところか、ウツボカヅラや熱帯植物が次から次へと目に飛び込んでくるので楽しい。所々にあずまやがあり、冷たい水で顔を洗えるし、トイレもある。11時10分ラヤンラヤン小屋にて昼食。薄味のチーズサンド・ゆで卵・少し油っぽい手羽唐揚げ・バナナ・水500ml。いつもはザックの中で他の荷物に圧縮された菓子パンを噛り付くだけなので、今回はゆっくりランチタイムを楽しめた。

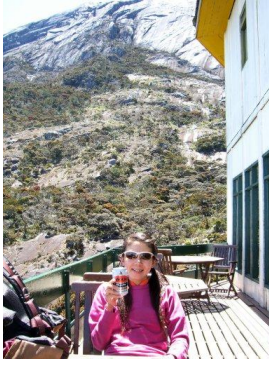


13時ラバンラタ小屋着。そのままテラスに行き、青空とキナバル山が迎えてくれる中、オレンジビールで乾杯した。夕食まで温水シャワーで汗を流し、窓から絶景を楽しむ部屋でのんびりくつろぐ事が出来た。日本の夏小屋とは大違いである。17時の夕

食は、多国の言葉が飛び交う食堂で、野菜や肉の炒め物・焼きそばなどのバイキング。味もまずまずであった。

7月15日

2時前起床。夜中にもかかわらず食堂は賑やかで、みんな軽食をモリモリ食べている。私も負けずにフレンチトースト4枚完食。2時50



分、多くの方は上下防寒着を着ていたが、私と主人は半袖で出発。初めは灌木の中、急な階段が続くので大渋滞する。サヤサヤ小屋を過ぎると、今までとは別世界の景色が広がる。花崗岩がむき出しの急斜面の登山道が続くが、数箇所につけられたロープに頼ることなく歩くことができる。暗闇のせいか自分一人がその場にいるようで、何とも神秘的な、このまま天まで行けるのではと思った。

5時30分山頂着。思ったほど風も無く、半袖では寒いものの、ウインドブレーカーを着て帽子をかぶるだけでしのぐことができる。日の出を待つ。

6時10分、雲海の切れ目から世界を照らす太陽の光がこぼれると同時に歓声があく。ここ数日、日の出を見ることが出来なかったらしいので、私達はラッキーであった。下山時、登りでは暗くて見えなかったが、手を握り親指を立てた様に見える岩（＝ビクトリアピーク）や、ロバの耳のような岩（＝ドンキーイヤー）を間近で見る事が出来、キナバル山に登っている事を実感した。



7時40分、ラバンラタ小屋に戻り朝食をたらふく食べた後、8時50分下山開始。登りと同じ道なのだが心軽く、見下ろす風景に足も軽くなる。



11時35分ゲート着、登頂証明書をお願い、ここでジャリーンとお別れ。昼食はレストランと思いきや、スタッフの会社の保養所での現地スタッフの手による料理。5種類の料理が竹の器に盛られ、これは本当に美味しかった！日本にはないローズジュースも堪能できた。今日の宿はKK市内のハイアット。窓から海は見えないが、インド・中国系の店が建ち並ぶ町を見渡し、一気に観光～気分！夕方町をぶらつき、エアコンが無い食堂にて汗だくでチキンライスを食べた。安く・美味しく満足！

7月16日

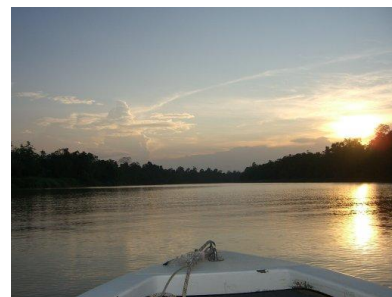
6時、送迎車でKK空港へ。朝食は機内でも食べられたが、ゴールデンラウンジでゆっくり食べることが出来た。これは良かった。サンタガンまで40分、寝るにはもう少し時間が欲しい。空港にはファビアンに代わり、ガイドのアリーナと名前は忘れてしまったMr. ドライバーさんが出迎え。アリーナは日本語が上手で、話も面白い。ガイドとして満点！今日はまず、空港から近いセピロクへ行く。オラウータンの餌付けの時間を待つ事40分。強い日差しが照りつける中、そして大勢の見学者の熱気でものすごく暑い。今回の旅で一番辛く、暑かった。しかし、



オラウータンの子供がバナナやサトウキビを食べる姿は、愛らしくてたまらない。早く自然に帰れるとい～ね。昼食は車で数分の、南国ムードいっぱいのレストランでバイキング。いつもながら主人より食が進む。次の場所ピ

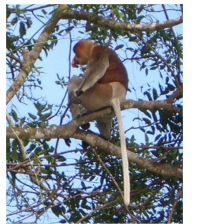
リットは、今回一番楽しく、もう一度行きたい。セピロクよりピリットまでは車で3時間。日本では考えられない荒れたガタゴト道をひたすら走る。アリーナは自然の

マッサージだと笑って話すが、筋肉痛の私は辛くて笑いが止まらなかった。ピリット村に入りボートで移動するために棧橋へ。ボートは手漕ぎを想像していたが、エンジン付のボートで風を浴びながら快適クルーズ。今夜の宿はキナバタンガン・ジャングルキャンプ。しかし、日本と言うキャンプ場とは異なり、立派なロッジである。私達が泊まったのは離れの棟で、窓には網が張られ虫対策OK。温水はでないがシャワーがあり、タオルもあり、ジャングルの中とは思えないほど快適で部屋は綺麗。



16時～18時、楽しみにしていたリバークルーズへ。天狗猿や蟹食い猿、鷹や鷺鳥、オオトカゲや蛇など次から次へと現れる。マングローブが生い茂る、ジャングルに息する動物を間近で見

られるのは感動の連続で贅沢な時間であった。夕食は中華料理風、どれも美味しく、片言の英語でアリーナとドライバーさんと話が弾み、またビールが進んだ。しかし夜通し続くジャングルからの奇妙な鳴き声にときどきびっくり飛び起きる！





7月17日

6時～8時、朝のクルーズ。散歩に出してしまったのか動物の数は昨日より少ないが、蟹食い猿の赤ちゃんを沢山見ることが出来た上、スピードボートでの朝の散歩は爽快で気持ちいい～！！朝食後、後ろ髪を引かれながらビリットに別れをつけ、サンタガンまでまたハードなドライブを楽しむ。ちなみにこのハードな行程は、日本の誇るランドクルーザー（プラド）が使われた。ドライバーいわく、ランドクルーザーはマレーシアで信頼されているのだという。空港近くの食堂でぶっかけ飯を食べ、15時KK着。



今日の宿はタンジェンアルリゾート。部屋の窓からは、リゾート地にかかせない広い庭園と真っ青な海が見える。キナバル登山とジャングル体験を終え、主人と心地よい一時を過ごしていると、突然ホテルのスタッフがケーキとフルーツを運んで来た。今回の旅は、新婚旅行を兼ねていると話していたからか、びっくり、思わぬ嬉しいプレゼントであった。石田さんありがとう！！幸せな気分になりながら二人で食べました。美味しかった～！

18時すぎ、夕食がてら市内探索。センターポイント、フィリピンマーケット、露店を見ながらハイアットの側にあるスーパーまで歩き、ビールと夜食を買い込んでいたらバスの時間に遅れそうになり、悲しくも最終日の夕食はハンバーガーになってしまった。しかもバス停のベンチで食べた。ホテルに戻り、夕食は仕方ないとして、最後の夜に乾杯をし今回の旅を語ろうとしたが、一本飲み終わった頃に主人は寝てしまっていた。



7月18日

最終日。早起きをして海辺の庭園を散歩し、お腹をすかせて朝食のバイキングへ。和食・中華はもちろん、ものすごい種類の料理がずらりと並び、目を奪われる。何回おかわりをしたのか覚えられないほどよく食べた。午前中は、腹ごなしに再び市内にお土産を買いに。良く歩き回ったおかげで次回KK市内はばっちり。午後は出発時刻まで海辺でゆ～くり。

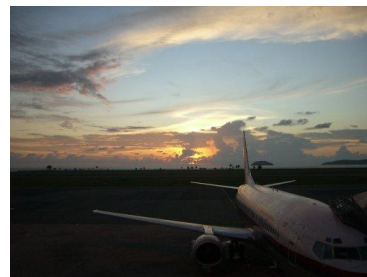


18時ホテルに別れを告げ、KL空港乗り継ぎ、19日朝、日本着。

今回の7日間ツアーは、最初から最後まで最高のプランで大満足でした。もし、誰かがキナバル登山を考えているな

ら、下山後、自然のマッサージを受けながらビリットへ行き、ジャングル・リバークルーズを体験し、リゾートでの～んびり楽しかった事を思い返し、疲れを癒してから帰国するこのツアーを薦めたい！！ボルネオ、私と主人の一生忘れられない旅をありがとう！

(文書：池田智恵 写真・レイアウト：池田滋)



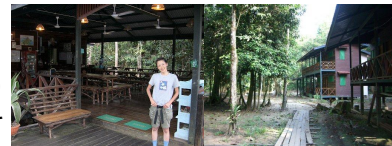
#### ◆◆ キナバル・ネイチャーツアーの総括 ◆◆

日本で登山を楽しんでいる私たちにとって、山に登ることは決して特別なことではありません。しかし、であるがゆえに世界遺産であるキナバル山に登ったという経験は感慨深いものがあります。なにより日本ではありえないスケールの山容に大変な魅力があります。また灌木が切れ、花崗岩がむき出しになる3800m付近からの景観は見るものを圧倒します。当然頂上からの景色も日本のそれとは別次元のものだと思います。



また別の視点で見た場合、日本の登山で問題になっている環境問題に対するひとつの答えというか、モデルケースでもあると感じます。自然を守りつつ、また人々にいかにその大切さと偉大さ、感動

を与えていけばよいのか、という部分にこのキナバル自然公園のすばらしさを感じます。当然、キナバル山の裾野に広がる豊かな自然、そしてキナバル山と言う名山があつてのことであることは言うまでもありません。しかし、それ以上に感動したのがビリットでのボートクルーズです。登山は日常的なことになっている私たちにとってボートは未知の体験、ジャングルとそこに生息する動物をクルーズしながら観察できるという経験はいまだかつてなく、とても新鮮で興味深いものでした。豊かな自然と、そしてビリットのスタッフの気さくさ、暖かさがなんとも印象的で、また是非キナバタンガン・ジャングルキャンプを訪れたいと思います。肥沃な川とジャングル、そこに暮らす人々は都会化した日本に住む私たちにはとても羨ましく、また数十年前の日本を思わせるどこか懐かしい感じがするものでもあります。



マレーシアは、私たちが想像する異国という面と、そして懐かしさを併せ持った場所で、われわれ日本人にはとても居心地の良い場所なのではないかと思えるのです。機会があれば、今度は是非ジャングルツアーに行きたいものです。(文：池田 滋)